

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行・編集：仙台教区サポートセンター
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
仙台教区サポートセンター
Tel.022-797-6643 Fax022-797-6648
支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン
※通信欄に「東日本大震災」とご明記ください。

2020年9月22日は、新潟教区に待ちに待った成井大介司教様叙階式の日。仙台教区サポートセンター誕生の日から、2年間、親身になって、東日本大震災復興支援のために、粉骨砕身ご尽力くださいました。また、この号には、大船渡ベースのユニークな活動が紹介されています。大船渡教会の初聖体の子どもたちへの奉仕活動を通して、教会を喜びで満たしたという働きです。さらに長年、被災を受けたままになっていた公園が復活したことを知らせる喜びのニュースです。カリタス釜石は、復興公営住宅での「お茶っこ」の様子が、NHK盛岡の取材を受け、それが、全国放送にも取り上げられたことのご紹介です。人と人との交流を今後も大切にしていきたいと思います。

子どもたちの真ん中にイエス様 ～初聖体式を迎えて～

カリタス大船渡ベース 大河内 愛



皆が見守る中、喜びでいっぱいの初聖体式が行われました

8月2日、30日に大船渡教会で初聖体式が行われました。4月に予定していた初聖体式でした。小学2年生～中学3年生までの男女計8名が初聖体を受けました。

現在、大船渡教会に常駐の神父様はおられず、ベーススタッフにシスターはおられません。訪問先の信徒宅に初聖体を受けていない高学年の小学生や中学生がいて、初聖体の準備クラスを早急に始める必要性を感じました。

初聖体クラスは昨年7月から始めました。元スタッフのシスターや仙台教区第3地区の神父様方がサポートしてくださいました。

子どもの日常において神様はどこにいらっしゃるでしょう？ 神様は空の上にいて、初聖体クラスになると急に顔を出すといった印象でした。毎回キーワードを設け、絵を使ってお話ししました。パパ様の来日にあわせ、パパ様と世界中の子どもとの書簡集の絵本を紹介しました。子どもが熱心に耳を傾けたのは「親たちはどうして言い争うのか？」でした。パパ様の答えに子どもは頷きました。

ある日は、イエス様の誕生から公生活の話をしました。「さて、問題です」と言うと、ある子どもは「チャ、チャン♪」と効果音を言い、私は「イエス様のお父様の仕事は何だったでしょう？」と言うと、子どもは花屋さん、パン屋さんなど次々に言いました。「答えは大工さんです」と言うと、ある子どもは「お父さんと一緒だ」とうれしそうでした。他の子どもが「じゃあ、〇〇くんがイエス様だね」と言い、その子どもは「違う、違う」と慌て、みんなで笑いました。その瞬間、子どもたちは、イエス様を身近に感じたようでした。

子どもの順応性は早く、回を重ねるうちに神様、教会、秘跡などの話をするこの場に馴染んでいきました。定期的な集まりは効果的でしたが、コロナ禍となり、半年経過すると、元に戻ってしまいました。

初聖体前日、ゆるしの秘跡と総まとめをしました。要点はプリントを見ればよいですが、これより大事なことは、この集いの真ん中にイエス様がおられると子どもが感じることでと痛感し、定期的な集いが大事だと思いました。

パトリック神父様がゆるしの秘跡をしてくださり、初聖体式のリハーサルを入念に指導してくださいました。初聖体式のミサの中で、神父様は「パンとぶどう酒がイエス様の体と血に変わり、それを戴く私たちはイエス様とひとつになることだ」とお話しになりました。子どもとお母様の代表が共同祈願を行いました。

「教会に子どもがいるといいね」と教会の皆さんが喜ばれました。コロナ前は、フィリピン出身の信徒がフィリピン料理を持ち寄り、教会の皆さんで戴いてお祝いしましたが、今回はありませんでした。教会とパガサ会からプレゼントが渡され、一瞬だけ密になり集合写真を撮りました。

一人ひとりがご聖体を頂いた瞬間、ニコツとした表情を見て安堵しました。いつもイエス様が心の真ん中におられることを子どもが感じてくれたらいいなと願っています。



初聖体おめでとう！

人と人との交流は力

カリタス釜石 久保 寛人

9月7日に、「ふいりあ」再開後2回目となる「お茶べり広場」(復興住宅の住民を対象としたお茶っこサロン)を開催し、今回もオンラインを利用してボランティアの皆さんにもご参加いただきました。前回都合が悪く、参加を見送った住民も来られ、久しぶりに見るボランティアの皆さんの顔を見て笑みがこぼれておりました。ボランティアの皆さんは、早く釜石へ行きたいという気持ちや、それぞれの近況をお話しされ、住民の体調を気遣う場面もありました。



オンラインでふいりあと各地のボランティアさんがつながりました

この日はNHK盛岡の取材が入り、コロナ禍での支援団体の活動と、住民の様子を撮影していきました。この様子は岩手県のローカルニュースのみ放送でしたが、数日後には全国放送の番組でも取り上げられました。インタビューを受けた女性の住民は、友人や近所の方、外出した先で、「観たよ!」「元気そうでよかった!」「バッチリ写っていたよ!」と、多くの反響があったようで、照れくさそうに話をしてくれました。

9月11日にはフリースペース「ふいりあ」で、パステルアート作成教室が開催されました。先生となったのは、カリタス大船渡のスタッフのみなさんで、これは、大船渡ベースで行っている人気の手芸の一つだそうです。今回開催するきっかけとなったのは、カリタス大船渡ベース長さんから届いたメールでした。「大船渡でも人気の高い手芸なので、釜石でもいかがですか」といった内容にこちらにも興味が沸き、協力をお願いしました。結果、10名以上の参加があり、盛況となりました。



初めは「難しそう」とおっしゃっていた方も楽しんで手を動かしていました

型の上からパステルの粉を指ですりこんで絵を作ります



参加されたみなさんは、絵ハガキにサンマやコスモスといった秋の味覚や花を、紙型を使って描き、作品を完成させました。このような作品を作るきっかけをいただいたことに、参加者は感謝の言葉を述べ、帰られました。

普段「ふいりあ」では、手芸というと折り紙が大半を占めるため、パステルアートといった手芸は、参加者全員が初めて取り組み、とても楽しめた様子でした。

お茶べり広場、パステルアートともに、ボランティアや他ベースの協力のおかげで成り立つイベントでした。人と人との交流は今後も大切にしていきたいと思っています。



サン・アンドレス公園、復活!

カリタス大船渡ベース 菅原 圭一

皆さん、聖ペトロの弟である聖アンデレの名前が付けられている「サン・アンドレス公園」をご存じですか? この名前をもつ公園が大船渡にあるのです。ご紹介いたしましょう。

残念ながら、この公園も東日本大震災で被災しました。長い間、がれき類が積み重なっていましたが、岩手県が住民の意向を汲みながら復旧工事を行なってきました。この程、大船渡湾に面する緑地公園の「サン・アンドレス公園」が完成し、遊具や駐車場の利用が可能になり、天気の良い日には地元の家族連れや散歩、ジョギングなどをする人などが訪れています。



「サン・アンドレス公園」という名前は、今から410年前の慶長16年（1611年）に、スペインの探検家セバスチャン・ビスカイノが仙台藩主の伊達政宗の許可を得て、松島以北の沿岸の測量を行った際に訪れた大船渡湾の景観の素晴らしさに感動し、その日11月30日が聖アンドレス（現在の日本語表記は聖アンデレとなっています）の祭日だったことから、「サン・アンドレス湾」と命名したことに由来しています。ビスカイノの書いた「金銀島探検報告」（村上直次郎訳）には「大きな入り江（大船渡湾）にある盛（さかり）において夜を過ごしたり」との記述があるそうです。ビスカイノの本当の目的は、金銀島探索だったといわれています。

金銀島というのは、マルコポーロの書いた「東方見聞録」の中にある「黄金の国ジパング」の記述が時を経て「金銀島伝説」としてヨーロッパに伝わったものでした。「黄金の国ジパング」とは、金色堂に代表される奥州平泉のことでしたが、その黄金文化を支えた中心的な産金地は大船渡市や陸前高田市、住田町などの気仙地方であったといわれ、ビスカイノはまさにその玄関口に到達していたのです。しかしこの時、ビスカイノは大船渡から見える今出山に眠る金鉱脈に気づくことなく、翌日には大船渡を出港し、北に向かって行ってしまいました。そして2日後の12月2日に越喜来湾沖（三陸沖）で「慶長の津波」に遭っています。

その後、ビスカイノは伊達政宗の助けを得て、帰国のために「サン・ファン・パウティスタ号」を建造してもらい、政宗の家臣の支倉常長らと共に、スペインやローマに向かいました。これは「慶長遣欧使節団」といわれ、日本人として初めてヨーロッパの国と外交交渉をした画期的な出来事となり、また日本の存在と高度な文化をヨーロッパ社会に知らせることとなりました。

「サン・アンドレス公園」は震災前から芝生が青々とした美しい公園で、地域の住民の方々の憩いの場として親しまれていました。野外コンサートや各種イベントの会場となったりもしました。しかし、東日本大震災の津波で被災し、その後9年5ヶ月を経て復活しました。トイレ、水飲み場、複合遊具などが設置され、公園のシンボルでもある展望台からは、公園全体はもちろん、約8.3mの防潮堤があっても、その外側の美しい大船渡湾の様子や、大震災からの復旧復興が進む中心市街地の様子を一望することができます。コロナ禍が収束したら是非多くの方々に訪れて頂きたい大船渡の観光スポットになっています。



展望台から望む大船渡の様子
復旧工事が進んでいます



安心して過ごせる公園が復活
地域の皆さんの憩いの場として
観光スポットとして末永く愛される
ことでしょう

成井司教様、おめでとうございます！



叙階式前日 寄せ書きを手に

2011年3月11日（金）14時46分、M. 9.0という巨大地震が発生し、大津波の被害、その上、福島原発の爆発事故も引き起こしました。教皇フランシスコは、訪日された時、3重の災害とおっしゃいましたが、まさにその通りでした。

当時、カリタスジャパンの援助部会秘書の成井大介神父は、これまでの海外での被災地援助の経験から、これは仙台教区が大変なことになると気づき、神言会の名古屋修道院からすぐに、レンタカーで東京に向かい、カリタスジャパンの事務局と連絡を取り、そのまま新潟に向かいました。新潟司教だった菊地功司教が、カリタスジャパンの責任司教だったからです。菊地司教と、さいたま教区司教の谷大二司教、カリタスジャパンの稲江佐和子氏と共に、山形に立ち寄り、必要な物資を積めるだけ積み、仙台教区事務所で、平賀徹夫司教、小松史郎神父と話し合い、仙台教区サポートセンターを立ち上げ、成井神父は、そのまま2年間、仙台教区サポートセンターの事務局長として、各地の被災状況の確認、ベースの立ち上げ、ボランティアの受け入れのシステム作りなどさまざまな分野で大活躍してくださいました。

その後、神言会のローマ総顧問に選ばれ、日本を離れていらっしゃいましたが、このほど、新潟教区司教に選ばれ、9月22日、新潟カテドラルで司教に叙階されました。

叙階式には、限られた人数しか出席できないということでしたので、かつて、成井神父様にお世話になった人々に呼びかけをして、お祝いと感謝の気持ちを込めた寄せ書きをしてお送りしたところ、それをご覧になっている写真をお送りくださいました。

新潟教区の司教としてのこれからのご活躍を期待し、お祈りしております。

（仙台教区サポートセンター 一同）



2013年3月全ベース会議 懐かしい皆さんとともに